

# TOPICS

#01

## 患者さんが求める 医師とは どんな医師なのか？



高知大学医学部外科学講座外科1 教授

花崎 和弘

### 1 はじめに

2006年4月に高知大学に赴任して以来、11年目が終わろうとしている。5年生のクリニカルクラークシップに回ってくる医学生全員を対象に、本稿タイトルのミニレクチュアを行っている。レクチュアは図を書きながら、「患者さんが求める医師とはどんな医師なのか？ 皆さんわかりますか？ グローバルスタンダードな考え方は、ArtとScienceとHumanityのバランスがとれた医師です」からスタートする。

### 2 Art

Artを一番上に書いたのは、患者さんは臨床能力が優れた医師を求めているからです。外科医なら手術が上手ということです。すべての患者さんは手術の上手な外科医に手術してもらいたいと思っています。だから外科医は、患者さんのために、手術手技を磨かなければなりません。では具体的にArtを磨くにはどうしたらいいのでしょうか？ 私は優れたメンター（指導者）に出会うことが最も重要だと思っています。例えば手術なら各々の分野で自分のメンターとなる優れた指導者を見つけ出し、直接教えを請うことが理想です。またメンターは日本にいても海外にいても構わないと思います。私の経験では、Artに優れたメンターほど、自分に厳しいけれど、同時に他人にも厳しい人が多いように感じます。もし皆さんがメンターから手術中に叱責を受け、悔しい思いをしたら、どのように対応しますか？ そのメンターを恨み、メンタ

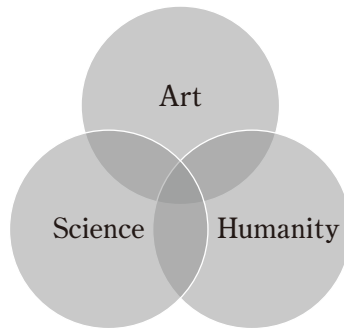


図 患者さんが求める Art と Science と Humanity のバランスがとれた医師

一のいないところで悪口を言えば、必ず以心伝心でメンターにも悟られ、良好な師弟関係は築けなくなります。私はこう考えることにしています。「今、目の前で自分を叱責してくれているメンターは自分より早く亡くなる確率が高い。だからこの恩師が生きていうちにいろんなことを教えていただこう」と。そう考えるだけで、まったく別の世界が広がります。いずれメンターは貴方に目をかけてくれるようになります。他の人には教えていない細かいことまで、お節介なくらい、いろいろ教えてくれるようになるのです。嘘だと思ってもいいかもしれませんが、一度試してみてください。

医師というのは異動の多い職業です。人生で1人のメンターとじかに接する時間は皆さんの予想よりもずっと短く、一期一会と言っても過言ではありません。

### 3 Science

Artを支える1つ目の柱はscienceです(図)。患者さんのために、良い医者になるためには、一生涯勉強を継続しなければなりません。具体的にはEBM (evidence based medicine) をしていくことが大切になりま

す。EBMとは自分が担当している患者さんの診療に関する科学的根拠を得るために文献を読み、その知識を患者さんのために活用することです。米国ではレジデントの評価項目の中に、1週間に担当患者さんに関する文献をどのくらい読んだかという項目があるくらい、文献を読むことは重視されます。残念なことに、最新の医学知識が提供されている文献は、日本人にはハードルが高い、英語で書かれていることが多いのが現状です。「英語力を身につけよう」というのはEBMを実践するために避けては通れない課題になります。

しかし、ここで考えてほしいことがあります。どんなに過去の優れた文献を読み込んでも、どうしても解決できない問題や疑問が生じるのが臨床現場です。その時、皆さんならどうしますか？ そうです。どうしても解明したい問題や疑問なら、自分自身でエビデンスを創出する、すなわちECM (evidence creative or creating medicine) を実践しなければなりません。つまり自らの手で、研究をする必要に迫られます。そんな時、大学というのは大変優れた機関だと思います。私のように若い時から関連病院に長く勤務し、大学での研究より関連病院での手術に明け暮れていた人間が言うのだから間違いありませ

ん。臨床能力重視の米国でも優れた外科医は、2年間くらい、自分のキャリアパスの中に basic science にどっぷり浸れる期間を組み込みます。彼ら、彼女らは、Art を支える science の重要性を認識しているからです。

皆さんもぜひとも大学を活用して EBM だけでなく、ECM も行う期間を作ってください。手術の上手な外科医は、皆さん口をそろえて言います。「手術は手でするものではなく、頭でするもの」だと。

## 4 Humanity

Art を支えるもう1つの柱は humanity です (図)。医者は患者さん、つまり人間を相手にする職業です。だから humanity は science と並んで art を支える大切な要素になります。それでは医師に必要な humanity とは何でしょうか？ 私は「医療訴訟に巻き込まれない」humanity が大切だと思っています。つまりこれからお話しする humanity は皆さんが医師になった時に、医療訴訟に巻き込まれないためのものです。これには有名な教訓があります。

昔ハーバード大学は医療訴訟の多い大学だったそうです。当時の学長はなぜ世界中から集まった優秀なスタッフがいて、世界最先端の医療を提供しているにもかかわらず、うちは医療訴訟が多いのだろうか？ と疑問に思い、医療現場を見学に行ったそうです。そこで「これでは医療訴訟が多いはずだ」と気づいたとのこと。どうしてだと思いますか？ その理由は、患者さんに対して「上から目線」のドクターが多かったからです。そ

の学長が立派だった点は、自分の目で現場を確かめに行ったことと、その後、若い医師や医学生に対する教育方針をガラッと変えたことです。どうしたと思いますか？ 「腰の低い」ドクターの育成に乗り出したのです。腰の低いというのはわかりやすい表現ですが、英語では Humility とか Humble とか言います。つまり謙虚な医師です。社会的には医師は最もプライドの高い人種だと思われがちです。だからこそ謙虚さが求められるのかもしれませんが。教育の力というのは凄いですね。腰の低いドクターを育成することによってハーバード大学の医療訴訟は劇的に改善されたそうです。それが世界のモデルとなり、医師の humanity で最も好ましいのは「腰の低さ」となりました。

皆さんはいきなりそう言われても、とまどう人も多いと思います。しかし、今日から俳優さんや女優さんになったつもりで、患者さんの前では「腰の低いドクター」を演じてみてください。そうするだけで、皆さんをみる患者さんの目が明らかに変わるはずですよ。

## 5 終わりに

時代の変遷とともに、若者気質も変わっているとされて久しい。もしかして、外科医のようなハードワークは今のようなワークライフバランスを重視する若者たちには受け入れがたいのかもしれない。ただし、古今東西、患者さんから最も求められる医師とは、ワークライフバランスのとれた医師ではなく、Art と Science と Humanity のバランスがとれた医師であることに異論はないと信じたい。